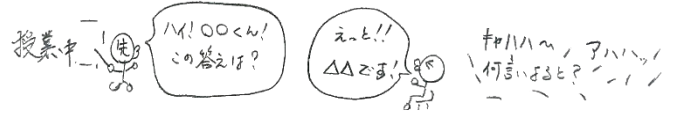




★発表での間違いが恥ずかしい君

答えを間違え、クラスで笑われることがある。別に「笑われても平気」という人もいれば顔面真っ赤になり精神的ダメージを受けてしまう人もいる。



「バカにされた」という気持ちでいっぱいになり、自己嫌悪におちいることになる。そんな君に読んでほしいのである。

実はこの「笑われる」「バカにされる」という感覚はとても貴重な感覚なのである。そんなあなたは極端に「笑われる」「恥をかく」という感覚を嫌っているのだろう。そんな目にあわないように発表を控えたりできるだけ目立たずに授業を終えたいと願っている。だが、授業に攻めの姿勢で臨んでその結果の間違いなら、何も「恥」に感じることはないのである。むしろ馬鹿にされて身についた知識や体験は絶対に忘れない頑強なものになる。「何が間違ってたのか」「どうして笑われたのか」「正しい答えは何だったのか」それをハッキリ覚えているものである。「悔しさ」「恥ずかしさ」がサポートして、あなたの記憶を手助けしてくれているのだ。

またその逆に、今までにあなたがだれかの間違いを笑い飛ばした経験をもつなら、「間違いの理由や原因」「正しい答え」を覚えていることは少ないだろう。すでにどうでもよい「過去」になっているからだ。

時に「笑い」は刹那的で無責任である。

クラスの誰かが間違えばたとえ自分に同じ問題を解く実力がなくても「笑い」に参加できる。そして「笑い」に参加しているうちになんだか「自分にはできそうな気分」になってくるが、それはただの思い過ごしであり勘違いである。

教室はよい子が正解ばかりをならべる場所ではない。

教室は、堂々と胸をはって間違いを発表することが許される特別の場所なのだ。社会に出ると、間違いが許される場所はなかなかあるものではない。「間違ふ」ことは学生の特権であり、それが許される「場所」が「教室」なのである。

さらに言うならば「答えを間違えること」が恥ずかしいのではない。「自分の答えが正しいか間違っているか追及しないこと」が恥ずかしい行為なのであり、

「自分の答えはさておいて、他人の間違いを笑うこと」こそ恥知らずな行為なのである。

昔の人は良いことを言ったものである。

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」



3月の新聞記事より

可能性を信じ 夢を諦めない

(みやま市・高校生)

私の夢は飛行機の客室乗務員になることだ。これは小学生の頃から変わっていない。しかし、コロナ禍のいま緊急事態宣言などにより飛行機の利用が激減し、航空会社はたくさん赤字を抱えている。このため今年の客室乗務員新規募集を中止した企業もあったと聞いた。

ずっと応援してくれていた家族からも最近、この夢を目指すことについて不安を打ち明けられるようになった。その言葉に私はいつも「大丈夫」と強気で答えている。しかし、正直なところ私は先の見えない将来に不安でいっぱいである。

もうすぐ2年生になり本格的に自分の進路を決めていかなければならない。この選択が人生の分岐点になるかもしれない。私はよく人と比べて自分にはできないと諦めてしまう。だが、今回ばかりは自分が長い間憧れ、目指した夢を諦めたくない。どんなに険しくても可能性を信じて、いつの日か私の夢である客室乗務員になれるよう、日々精進していきたい。